

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 4 月 25 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370357

研究課題名(和文)近世ドイツ奇譚集の説話学・民衆文化論的研究

研究課題名(英文) Popular Cultural Study on the "Curiosity"-Narrative Collections in Early Modern Germany

研究代表者

吉田 孝夫 (YOSHIDA, TAKAO)

奈良女子大学・人文科学系・准教授

研究者番号：40340426

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：近世のドイツ語圏に流布した「奇譚集」と呼ばれる著作群をもとに、時代の精神的特徴を明らかにした。世界の摩訶不思議な出来事を集積して読者に供する、16世紀から18世紀にかけて陸続と現れた一大流行の読み物において、アウグスティヌス以来の否定的な「好奇心」観がルネサンス期に価値転換を受け、現世の多彩な現象・事件への独特な関心を生んだことが知られる。具体的にはタンホイザー伝承とアルラウネ伝承をもとに、それらが後のグリム兄弟によって近代的解釈を与えられる以前の、中世末・近世特有の政治的言説と民衆信仰のありかたを叙述した。またこの関連で、近世作家グリンメルスハウゼンの重要性があらためて明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Based on a group of works called "curiosity"-narrative collections which was disseminated to the German-speaking region of early modern epoch, I revealed the mental-historical features of this era. This was a great epidemic reading that was numerous published from the 16th century to the 18th century, accumulating the mysterious events of the world to serve bourgeoisie readers in cities. The negative "curiosity" view since Augustine underwent value change in the Renaissance period, and a unique interest in diverse phenomena and incidents of this world arise. Specifically, based on Tannhaeuser and Arlaune tradition, I analyzed the unique political implications of the discourse and the people's beliefs to the late medieval times and the early modern era before they were given modern interpretations later by the Grimm brothers. Also in this connection, the importance of early modern writer Grimmelshausen was revealed.

研究分野：独文学

キーワード：奇譚集 プレトールウス 好奇心 ルネサンス グリンメルスハウゼン

1. 研究開始当初の背景

近世(または初期近代)のドイツ語圏では、奇譚集(Kuriositätenliteratur)と呼ばれる大衆向けの著作が流布した。この名称の概念規定を行い、この分野の研究の草分けとなったR・シェンダの記述に基づくなら、これは世界の摩訶不思議な出来事を集積して読者に供する、16世紀から18世紀にかけて陸続と現れた一大流行の読み物であった。同じ近世に、皇帝ルドルフ2世がプラハに設えた「驚異の博物館」(Wunderkammer)が存在するが、奇譚集はその書物版と考えればよい。近世の文化的所産として、形式的には人文主義的な知の累積の作法に基づいている。内容的には、宗教改革以後の宗教的説話や奇蹟譚と重複しつつ、しかしまだ近代18世紀の百科事典のような合理的秩序をもつには至っていない。活版印刷の普及とともに誕生した読者層、すなわち当時の都市市民が知の理想とした「博識」(Polyhistorismus)を象徴する、雑多な内容の混沌的な書物である。とりわけ読書市民層に対して、有用な知を提供すること、娯楽的かつセンセーショナルであること、またキリスト教的に教化的であること、などを特徴とした。

科学革命の近世に、自然科学の幾多の発見を取り上げながら、しかしまだ啓蒙主義的・合理主義的なスタンスが確立されてはならず、民衆の迷信、正統信仰、種々の出来事の批判的観察と経験的吟味という諸要素間の緊張のなかで、近世の奇譚集は形成される。

近世ドイツ文学をめぐる従来の研究は、グリムメルスハウゼンという偉大なる民衆的小説家を除けば、こうした大衆的散文の領域を長く等閑視してきたが、これは近世の日常生活と思考様式、物語伝承の系譜と伝播の道筋を知る、きわめて重要な資料である。そしてこの前近代、近代への過渡期の物語群を鏡に、われわれの生きる近現代においての、大衆と物語の関係について考察することができる。

19世紀初頭の近代ドイツで、この奇譚集に深く着目したのがグリム兄弟であった。グリム兄弟による、いわゆる民間伝承の収集のなかに、口承ではない、書物に基づく文学的な書承記録が無視できない場所を占めていることは、現在では基礎的な知見である。そのメルヘン集と共に、とりわけ兄ヤーコブ・グリムが主に手がけた『ドイツ伝説集』には、近世奇譚集に依拠する物語が多数収められている。とりわけJ・プレトーリウスという著述家は、ヤーコブが伝説集の序文で明言しているとおり核心的な人物であった。

この近世人の傑出した「語り」の才能を強調する重要な研究(ファン・インゲン)が近年にある。ドイツ語圏であれ日本であれ、グリムのテキストの研究は、近代的な子ども観や家族観に基づいた、主としてグリム以後に視野を定める分析が中心的であり、また他方、グリム以前への視点がとられたとしても、そ

れは一気に古代ゲルマンの異教性へと飛躍する傾向があった。つまりその中間、すなわち中世と近世の時代を歴史的に吟味する姿勢を欠いてきたのである。グリム研究は、グリム・テキストの歴史的生成の検証においてなおも不徹底な部分を残しており、そして近世研究から見れば、奇譚集という、時代の散文と民衆の共同幻想の宝庫は、なおも精緻な分析を受けぬまま、復刻されることもなく書庫に眠りつづけているという状況である。

とはいえこの60年ほどのあいだに、中世・近世とグリム・テキストの関わりを問う、歴史的な反省度の高い研究が散発的には現われていた。先述のシェンダのほか、L・レーリヒ、B・デネケ、G・ハイルフルト、E・モーザー＝ラートといった民俗学者たちによる労作であるが、これに加えて、近世の奇譚集に関わる必携の文献を著したのがW・ブリュックナーである。特に、彼を編著者とする大著『民衆説話と宗教改革』(1974年)は、宗教改革前夜から約2世紀間のドイツにおける聖・俗の説話の諸相を、特徴的なテーマ・ジャンル・人物別に描き出したもので、その有用性は今も汲み尽くされていない。

2. 研究の目的

中世末から18世紀初頭にかけてのドイツ語圏で、市民大衆層向けに著され、大きな人気を博した奇譚集の著作群を対象に、それを1)説話伝承学の観点から、グリム『ドイツ伝説集』に流入する以前の物語のすがたを歴史的に跡づけ、ドイツ文学の散文史における重要な一章をなすものとして論じると同時に、2)精神史的・民衆文化論的観点から、当時の奇瑞・異界・迷信観を抽出することで、「文明化の過程」(N・エリアス)に置かれた、近代ヨーロッパの揺籃期におけるドイツの市井の人びとの心的葛藤を、エリート文化との相互作用を視野に、具体的に描き出すことを目的とする。

ブリュックナーの先駆的な基礎研究を踏み台として、本研究はまず具体的に、ドイツの山の精霊リュベツァールにまつわる近世伝承をもとに、ドイツ語圏東部の鉾山地帯における近代化・文明化と民衆の信心・迷信の相互関係を問う。これは2009年まで取り組んだ基盤研究(C)「近世ドイツ鉾山・山岳伝説の研究」(課題番号19520230)で残された大きな問題であり、この研究と本研究とを接続する主題でもある。近世リュベツァール伝承の形成には、奇譚集の代表的著述家J・プレトーリウスが最も深く関与した。この物語群と、風土・産業上の地域性の精査により、近世ドイツ民衆の共同体を包みこんだ言説の政治・社会的引力、物語のイデオロギー性を問う。

3. 研究の方法

16世紀から18世紀初頭にかけて出版された近世ドイツ奇譚集の古資料のなかから、本研究に関わる代表的出版物を抽出し、これをドイツ語圏各地の図書館・文書館から、PDFデータならびに書籍化した形で取り寄せる。そして初年度には山の精霊伝承を、次年度には悪魔伝説を分析の対象として、個々の物語の検討と分類、物語間の相互作用、書物としての機能、地域性についての考察を進める。

それぞれのテーマに関わる二次文献を収集・精査しつつ、同時に、物語言説の社会的力学に関わる著作を読みすすめて、理論的な基礎づけを行う。そして2年目終了時までに2本の論文をまとめた上で、それを踏み台に、さらなる有益な主題・視点の選定に着手する。

なお本研究は、『日本霊異記』を一例とする日本の説話文学の諸研究の成果と方法を適宜参照する。

4. 研究成果

本研究はまず、2009年まで取り組んだ基盤研究(C)「近世ドイツ鉦山・山岳伝説の研究」(課題番号19520230)からの接続として、ドイツの山の精霊リュベツァールにまつわる近世伝承を分析した。ドイツ語圏東部地域の鉦山・山岳地帯における近代化・文明化と民衆的信心・迷信の相互関係を問い、その際に、奇譚集の代表的な著述家であるJ・プレトリーウスに着目した。近世リュベツァール伝承の形成に中核的な役割を果たした人物である。この考察をもって、2014年に単著『山と妖怪 ドイツ山岳伝説考』(八坂書房)を完成させ、十余年にわたるドイツ山岳・鉦山伝承研究の一つの節目をつくることのできた。なお、この著書は、第13回(2016年度)日本独文学会賞(日本語研究書部門)を授与された。

奇譚集作家プレトリーウスをめぐる研究から、さらに青地伯水編の共著『啓蒙と反動』(春風社)に一編の論考を提出した。理性と合理性の近代に対する、人間と社会の種々の精神的反応が考察されたこの論集において、本研究代表者は、前近代としての17世紀、すなわち啓蒙主義以前の世紀における迷信観を担当した。具体的には、プレトリーウスの奇譚集『福引壺』に収められた一物語をもとに、その娯乐的・享乐的姿勢と、啓蒙主義の先駆とも見なせる合理的世界観との折衷の度合いを考察したのである。この物語は、後にグリム兄弟のメルヘン集に採られ、第三版以降は削除されたものであるが、いづれにしてもヴィルヘルム・グリムが、これを詩的真実として扱ったのに対し、プレトリーウスの語りはきわめて遊戯的、諷刺的であった。この特徴的な語りは、購買層としての市民読者への迎合であっただけでなく、センセーショナルな迷信の強調によって、合理的管理を強める社会に風穴を開け、人びとに少なからぬ精神的な自由を与えた。つまり迷信を蛇蝎

視する啓蒙主義時代の前夜において、迷信は、人間の精神的緩衝地帯として機能していたのである。

さて「近世ドイツ奇譚集の説話学・民衆文化論的研究」と題する本研究は、まずもって、その理論的基礎を構築しておく必要があった。それを試みたのが、研究初年度の論考「好奇心と聖性 近世ドイツ奇譚集・予兆集の生成と展開をめぐって」である。アウグステイヌス以来の西欧の「好奇心」観をたどったうえで、ルネサンス期からの大きな精神的変革を確認し、その流れのなかに近世ドイツの奇譚集ジャンルを位置づけた。具体的には、1633年に初出がある「犬に変身した貴人」という事件記録を考察の対象としながら、不可思議にあふれる現世の可視的世界への己みがたい好奇心が、近世においては、その彼方における不可視の世界、不可視の精神的・霊的領域への意識に、一定の緊張を伴いつつ支えられていることを明らかにした。

続いて2014年には、19世紀のグリムやワーグナーの作品化によって知られるタンホイザー伝承に着目した。これもまた元来は、近世の奇譚集に由来する物語であり、まずはグリムによる近代的な加工を明確にしたうえで、起源的資料におけるタンホイザー伝承の特徴を叙述した。そこには中世後期から近世初頭にかけてのドイツにおける宗教的・民衆信仰的な動揺がありありと看取され、教皇批判と新しい信仰への渴望が、商都の市場に立つ大道芸人によって歌われたことがわかる。そしてその歌謡は、新興のメディアである活版印刷の一枚刷りピラによって、カトリック圏を中心とする各地の民間伝承に定着していくのだった。

論考「タンホイザー伝承の前近代」においてこの考察を行ったのち、今度は、この伝承と日本の浦島伝説との類似に着目した論文を提出した。同年の論考「杖と玉匣 ドイツ・タンホイザー伝承の時間観念」がそれであり、異界の女の訪問と、そこからの現世への回帰というよく似た物語構造をもちつつ、それぞれ「杖」と「玉匣」という独特のアトリビュートを登場させることで、それを基点に非日常的時間が現出するという点も共通する。三浦佑之の浦島伝承研究をもとに言えることは、この小道具のもとに喚起される永遠性が、つまりは生の有限性をついには超えることのできない人間の切ない願望の表現であることであり、それはドイツのタンホイザー伝承にも同様に認められるのだった。

2015年には、やはりグリムの伝説集に採られた魔法の植物アルラウネの伝承に着目し、これをタンホイザー伝承の分析と同様に、その起源的資料である近世奇譚集に遡って考察した。ここではプレトリーウスを始めとする数点の奇譚集とともに、近世ドイツを代表する作家グリンメルスハウゼンの著作がとりわけ重要な役割を演ずる。

まず論考「貨幣の悪魔学 グリムとグリ

ンメルスハウゼンの「アルラウネ」伝承」では、19世紀のグリムによる伝承集と、17世紀のグリーンメルスハウゼンの原テキストとの字句の異同を整理することに努めた。両者の間には錯綜した関係があり、さらに両者の中間に立ついくつかの奇譚集にも微細な変更点があって、それらはみな、各物語を記述した書物、ないし奇譚集作家の意図に沿って施されたものである。物語というものは、その筋書き自体に何かの意味があるというよりも、その物語が収められた容器としての書物、環境としての奇譚集によって、玉虫色に姿を変えるものである。

続く論考「ガルゲンメンライン考 グリンメルスハウゼンと近世ドイツの植物幻想」においては、魔法の植物にまつわる中世末・近世社会の賤民観を明らかにした。迷信は、当代の人びとの健康・富への憧れの表現であり、しかも魔術的効力が社会的下層に投影されるのはなぜかということ考察して、民衆文化研究への一つの寄与とした。

最後に、近世ドイツ奇譚集の研究は、当代の代表的作家グリーンメルスハウゼンの重要性をあらためて明らかにした。青地伯水編著『文学と政治 近現代ドイツの想像力』への寄稿論文では、グリーンメルスハウゼンの近世的ユートピア観を叙述した。

また伝承研究の実りとして、キリスト教の信仰涵養のために読まれる宗教的説話集と、20世紀初頭ドイツにおける北欧神話の受容の跡を示す著作との二点の訳書を刊行した。

以上、本研究は、先行する鉦山・山岳伝承研究の成果を引き継ぎ、その総括を行った後で、まずは奇譚集研究の理論的基礎づけを行った。そしてタンホイザーとアルラウネというドイツ語圏の二つの重要な伝承の起源を訪ね、近代の脚色された姿とは別なるものを明らかにすることができた。いささか不十分なままに終わった点があるとすれば、それは奇譚集に頻出する悪魔伝承の分析である。魔法の薬草アルラウネの論考でいくらかの進展をみることができたとはいえ、この先の徹底した研究が求められる。しかし悪魔という表象はあまりに広かつ多様であり、何らかの特徴的かつ具体的な物語資料ないしモチーフへの着目が先決である。この点で、次年度より同じく科学研究費の枠内でスタートする予定である近世ドイツの「湯治場(Heilbad)」表象の研究が大きな有効性をもつと思われる。温泉は、天上的な至福の場所であると同時に、悪魔の跳梁跋扈する地獄のイメージでも現われたからである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

吉田孝夫、ガルゲンメンライン考 グリンメルスハウゼンと近世ドイツの植物幻想、希土、査読無、41号、2016、2 28

吉田孝夫、貨幣の悪魔学 グリムとグリーンメルスハウゼンの「アルラウネ」伝承、奈良女子大学文学部欧米言語文化学会欧米言語文化研究、査読無、3号、2015、142 168
<http://nwudir.lib.nara-wu.ac.jp/dspace/handle/10935/4323>

吉田孝夫、杖と玉匣 ドイツ・タンホイザー伝承の時間観念、奈良女子大学文学部欧米言語文化学会欧米言語文化研究、査読無、2号、2014、126 160
<http://nwudir.lib.nara-wu.ac.jp/dspace/handle/10935/3921>

吉田孝夫、ドイツ・タンホイザー伝承の近代、希土、査読無、39号、2014、28 61

吉田孝夫、好奇心と聖性 近世ドイツ奇譚集・予兆集の生成と展開をめぐって、奈良女子大学文学部欧米言語文化学会欧米言語文化研究、査読無、1号、2013、129 160
<http://nwudir.lib.nara-wu.ac.jp/dspace/handle/10935/3707>

[図書](計5件)

吉田孝夫、青地伯水(ほか9名) 松籟社、文学と政治 近現代ドイツの想像力、2017、33 58

吉田孝夫(訳) さ・え・ら書房、オトフリート・プロイスラー『ニット帽の天使 プロイスラーのクリスマス物語』、2016、196

吉田孝夫(訳・解説) 八坂書房、E・デーブラー/W・ラーニシュ『図説 北欧神話の世界』、2014、181

吉田孝夫、八坂書房、山と妖怪、2014、382

吉田孝夫、青地伯水(ほか7名) 春風社、啓蒙と反動、2013、15 45

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉田 孝夫 (YOSHIDA, Takao)
奈良女子大学・人文科学系・准教授
研究者番号：40340426